

弘前城かわら版

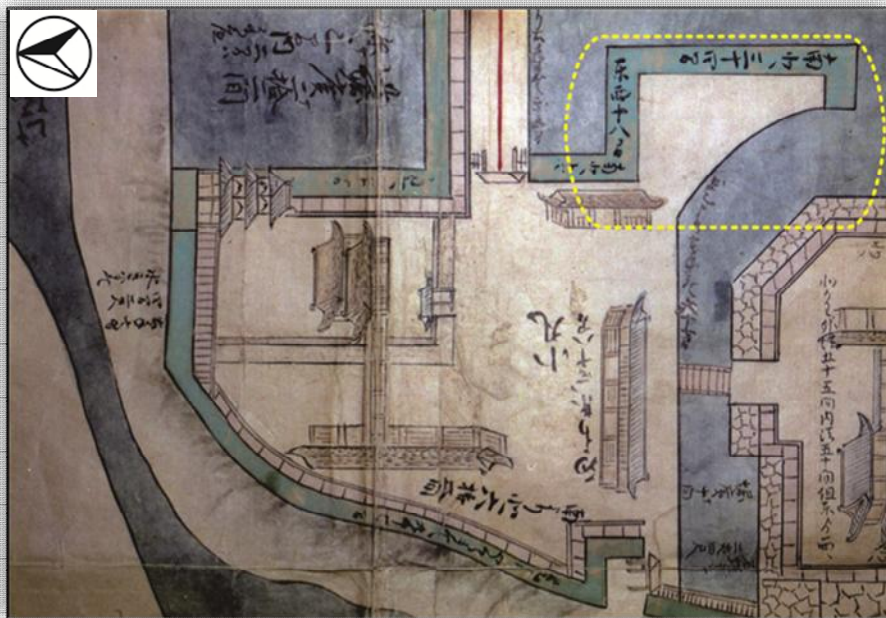
Vol.9 [令和6年1月5日]

史跡 弘前城跡は、土塁・石垣・濠（ほり）で囲まれた6つの区画で構成されています。この区画は一般的に「郭（くるわ）」と呼ばれるもので、弘前城跡では、各郭において約160年前の「幕末期」を基準とした史跡整備を行う予定です。今回は、本丸と並んで重要な郭である「北の郭（きたのくるわ）」の歴史と史跡整備状況について紹介します。

1. 北の郭とは

「北の郭」は、内濠を挟んで本丸の北側にあります。弘前城を描いた最古の絵図である正保2年（1645）「津軽弘前城之絵図（弘前市立博物館蔵）」には「小丸」の名称で描かれており、南北62間（約111メートル）・東西48間（約86メートル）の台形状の平場の南東隅に、南北34間（約61メートル）・東西18間（約32メートル）の突出部が取り付く形状をしています【図1】。

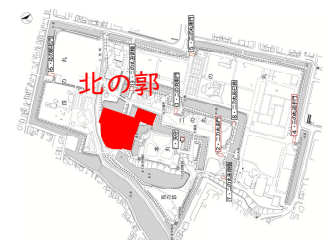
慶長16年（1611）の築城当初には、弘前藩初代藩主・津軽為信の正室である仙桃院（せんとういん）の御殿が置かれ、寛文12年（1672）から宝永元年（1704）頃までは4代藩主・信政の生母である久祥院（きゅうしょういん）の御殿があるなど、藩主の私的な空間としての要素が強い郭でした。その後は宝蔵や勅蔵が整備されて、廃藩を迎えます。北東隅の土塁上には、「子の櫓（ねのやぐら）」と呼ばれる三層の櫓がありました。南東隅の突出部には、城の守り神である「館神（たてがみ）」を祀る区画があり、明治時代に入って、社殿内から豊臣秀吉の木像が発見されました。この木像は、石田三成の遺児によって津軽に持ち込まれたものとされ、約260年間にわたって館神に隠し置かれたと考えられています。



【図1】正保2年（1645）
「津軽弘前城之絵図」 [部分]
弘前市立博物館蔵

北東隅の土塁上に子の櫓があり、その下に塀で囲まれた御殿が描かれる。塀の外側にも、3棟の建物がある。

南東隅の黄色の点線で囲まれた部分が、「館神」のある突出部。



2. 発掘調査と遺構整備

北の郭では、平成11年（1999）～13年（2001）に実施された約3,700㎡の発掘調査に基づき、平成14年に遺構整備工事が行われています。

発掘調査では、郭北端の調査区（北側調査区）において、北東隅の土塁上に8メートル四方の礎石列と、土塁下の平場に南北8メートル・東西24メートルの礎石建物跡を確認しました。それぞれ子の櫓跡、靱蔵跡と考えられます。また、郭南東隅の突出部（館神調査区）では、柱穴で構成される建造物跡を確認しました。「館神」の鳥居や本殿の痕跡と考えられ、本殿は正面（南面）の幅が約3.5メートル、他3面の長さが約4.5メートルの規模であったと推測されます。

現在、子の櫓跡については実物の礎石列を露出展示し、靱蔵跡や館神跡については礎石や木柱を復元して遺構の位置を示しています。発掘調査の出土品は、武徳殿休憩所にて見学可能です。



【図2】北の郭の発掘調査位置（平成11～13年当時）と遺構整備状況

【発行】弘前市都市整備部公園緑地課弘前城整備活用推進室

〒036-8356 青森県弘前市大字下白銀町1番地

電話 0172-33-8739 FAX 0172-33-8799 E-mail: kouen@city.hirosaki.lg.jp